

スーパーロボット大戦T 多次元の天秤

ジャギィ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

命を懸けて護るべきものー

それは、借金返済だ

目次

プロローグ	1
DMバスター	11
初陣	22
100万Gの男	31
特務一課の挑戦	41
ゲシュペンスト	51
目指すは火星	61

プロローグ

〃多元世界〃

時空振動弾と呼ばれる物により、次元の壁が破壊されたことで出来上がった、あらゆる次元、並行世界が混ざり合った世界。その世界は「根源的災厄」と呼ばれる存在によって、全次元と全宇宙が滅びの危機に瀕していた

しかし、多元世界に住まう人間たちは諦めなかった。何度も世界の危機を救ってきたスーパーロボット部隊、それは「Z E U T H」、^{ゼウツス}「Z E X I S」、そして「Z - B L U E」と名を変え、仲間を増やし、いくつもの並行世界を渡つたりもしながら戦い続けた

時には敗け、時には挫け、時には絶望し……しかし彼ら彼女らは最後まで諦めずに立ち向かい、ついにカオス・コスモスと呼ばれる宇宙で根源的災厄である「御使い」の統合体「至高神Z」を撃破、超時空修復を行い、多元世界を超次元世界へと再構築して、宇宙の危機を救った

「天獄戦争」が終わったことで「Z - B L U E」に属していた人たちはそれぞれの日常へと戻っていった。ある者は修理屋として伴侶の少女と一緒に世界を周り、ある者はグロリー・スターという軍属部隊に復帰し、ある者は並行世界の冒険家「ゲートトラベ

ラー」として世界を巡る旅に出た

そしてこれは、借金返済のために戦い続ける男の、新たな物語である

太平洋：…その隅っこでポツンと存在する無人島の上空に1体の機動兵器、リ・ブラスタTが佇んでいた

「こちらクロウ。指定のポイントについたぜ、チーフ」

ブラスタ（リ・ブラスタTの通称）のパイロットである男、クロウ・ブルーストは通信を繋ぎコールをかけた

すると通信先の映像がホログラムのように現れ、そこにメガネをかけた和服の金髪美女が映る。彼女の名はトライア・スコート。アクシオン財団第13研究所（通称スコート・ラボ）の代表でクロウの上司にあたる人物である

『こつちでも確認したよ。予定通り調査を始めておくれ』

「しかしよ、チーフ。再び次元震が確認されたってのは本当なのか？」

『正確には次元震の前兆であるエネルギーの余波を確認したんだけどね。超時空修復を行えば世界が安定したって言っても宇宙は広がり続けてるし新しい世界も確認されてる。ならそのしわ寄せがどこから来ても不思議じゃない』

「ま、せいぜい次元獣が出ないことでも祈るか」

そんな事あるわけないが、と内心思いながらクロウは無人島周辺の調査を始めた…その直後

『!!今あんたがいる場所一帯に次元歪曲を確認した!』

「まさか次元震か!」

ぐにゃあああ……

突如ブラスタが飛行している宙域全体が捻じ曲がったような錯覚をクロウは感じた。次元震自体に慣れはあったが、あまりに久し振り過ぎる歪む感覚に思わず動けなくなる。今クロウが巻き込まれている現象こそが次元震。次元の壁が地震のように揺れ、それによるエネルギーによって巻き込まれた人や物体、時には世界の一部そのものが別の場所、世界に転移される。あるいは転移してくる現象である

今回クロウが巻き込まれたのは前者の方だった

『クロウ!そこからすぐに離脱するんだ!』

「ダメだ!間に合いそうにねえ!」

フルスロットルでブラスタを加速させるが、相当な広範囲が揺れてるのか一向に脱出できる気配が見えない

そして次元震の揺れがピークに達した時

コオオオオオ…

ブラスタの胸部にはめ込まれている翠のクリスタルが強く輝き出した

「揺れる天秤のスフィアが…!？」

『クロウ——!!!』

カッ!

凄まじいまでに眩い光がクロウの網膜を焼き付け、ホワイトアウトと共にクロウは意識を手放した

そこは利便性と汎用性を重視した巨大な格納庫。株式会社VTXユニオン第一試験場にて、1人の男が目を閉じて静かに立っていた

サイゾウ・トキトウ。今日配属される特務三課の主任であり、黒のワイシャツと暗い錆色のネクタイの上からジャケットを羽織った姿は隠し切れない野性味を溢れさせていた

「…ねえ…」

「なんです？」

そんなサイゾウを見ていた2人の女性のうち、1人が口を開く

「あそこで寝ているのが、この特務三課の主任……?」

「ええ、そうです」

赤い髪にクールなイメージを持たせる女性、メリル・スパンナの質問に温和な雰囲気を感じさせるメガネの女の人、エイミス・アーネストは答える

「あれが噂の『野獣ネクタイ』か……初めて見た……」

「野獣ネクタイ?」

「ネクタイを締めたケダモノって意味よ。第二試験課にいたあいつがテストした機体はボロボロになって帰ってくるって評判だったの。……ここまで過酷なテストをするなんて、パイロットは人間じゃない……って担当者が言ってたわ」

「なるほど……それである人、一部の人たちから恐れられてるんですね」

サイゾウにつけられた二つ名の意味を聞いて納得するエイミス

「私はメリル・スパンナ……技術部からの転属よ」

「技術部第一課のメリルさんですね。お噂はかねがね……私はエイミス・アーネスト、総務からこちらの特務三課に転属になりました」

「総務か……道理である野獣ネクタイや私のことも知ってるってわけね」

それを聞いたメリルは自嘲するように言う

「じゃあ私が一課を事実上追放になったのも当然ご存知か……」

「…それを言うなら私も総務を追い出されたようなものですから」

「要するにここは吹き溜まりなのね…」

どうしてこうなったのか、メリルは自分の境遇を呪うしかなかった

その時、サイゾウたち3人に近づくと人物がいた。サングラスをかけて尚、その緩やかそうな雰囲気を感じないでいた初老の男性だった

「皆さん、集まっていますね」

「始業5分前には全員、集合していました」

3人に向かってかけられた声に最初に反応したのは、寝てたと思われるサイゾウだった

（あの人…寝てたわけじゃないみたいですね…）

（こっちの話が聞かれたかも…）

「気にするな。半分は夢の中だった」

「地獄耳…」

サイゾウの微妙なフォローに眩くしかないメリル

「コホン…挨拶してもよろしいですか？」

「は、はい」

返事を聞いてから、話を始める

「この特務三課の課長を拜命しましたヒロスケ・アマサキです。よろしくお願いします。スパンナさんとアーネストさんとは初対面でしたね」

「メリルと呼んでくださいって結構です」

「互いをファーストネームで呼び、チーム内の結束を高める…技術部のしきたりですね」
思いつくようにアマサキが言う

「では、私たちもそれにならいきましょう。エイミスさんもよろしいですか？」

「あまり好ましい風習ではありませんが、課長がおっしゃるなら構いません」

（可愛い顔でさりげなく技術部をデイスるか…）

歯に衣着せない物言いにメリルの機嫌が少し悪くなる

「こちらが特務三課主任のサイゾウ・トキトウくんです」

「トキトウだ。よろしく頼む」

サイゾウが前に出て自己紹介をする

「本日から特務三課は始動します。皆さん一丸となって頑張っていきましょう」

アマサキは簡潔に特務三課の主要務を説明する。その主な目的は新型機の開発であり、新たな体制のモデルケースとして設立された故、特務三課そのものが小さな会社のようなものと答えていく

「そんな大変なことをこの4人でやるなんて…」

その小さなとはいえ会社をたった4人、しかもうち3人が吹き溜まりに打ち捨てられるような問題児。その大変さにメリルは億劫な気分になるが…

「いえ…課員はもう1人来ます」

アマサキはそう答えた

「その人…初日から遅刻なんですか？」

「いや、本社の方の式典に参加してからになるので…」

ドゴオオオオオン!!!

『きゃあああああ!!!』

その時、凄まじい振動と爆音、そして悲鳴が第一試験場に響き渡った

「な、何?！」

「何かの事故でしょうか…?」

急な異常事態に混乱するメリルとエイミス。その中でアマサキは冷静に伝える

「落ち着いてください!まずは原因を調べましょう」

「振動と音はこつちからだ。行くぞ」

「ちよ、ちよつと!」

それだけ言うと言い、アマサキはすぐさま走り出し、アマサキもついていく形で移動した。それを追いかけるメリルとエイミス

爆音と振動の震源地までいくと、通り道の途中で銀色の何かが壁を突き破るように道を塞いでいた

「これは…機動兵器か？」

1発で巨大なその正体を見抜いたサイゾウ。次に、その機動兵器の近くで腰を抜かしている女性に話しかける

「大丈夫か？」

「ひゃっ！あ、た、助けてください！急にあの銀色の何かが壁から突っ込んできて…」

「…怪我はなさそうだな」

そしてサイゾウは考える。この道は第一試験場までの一本道、その道を通ってきたことを考えると…

「特務三課の新入社員だな」

「え…あ、はい。本日よりVTXユニオンに入社し、特務三課に配属になりました…ってそんなこと言ってる場合ではないと思います！」

「落ち着け。こうやって突っ込んできた以上、パイロットもタダではすまない。その証拠に動きを見せない…」

コオオオオオオオ……

ガシャン！

「!!」

「う、動きましたよ!?!」

「…コックピットが開いていく…」

その銀の機動兵器の胸部のクリスタルが淡く輝くと、ひとりでコックピットが開いていき…

ドサッ

「ひ、人が!」

「…どうやら、ただのテロリストとかではないようだな」

サイゾウはコックピットから倒れ出た男…クロウ・ブルーストを見ながら、そう呟くのだった

DMバスター

「うーん、随分と幸先の悪いスタートを切ってしまいましたね」

「まさか初日からこんな災難に見舞われるなんて、本当にツイてないですね」

会社に謎の機動兵器が突っ込んできてから2時間後

謎の機体ことリ・ブラスタはVTXユニオンの第二試験場の格納庫に入れられ、その機体に乗っていたクロウは気絶していたため、現在医務室のベッドで横になっていた。傷らしい傷がなかったのが幸いだったといえよう

「ところで、もしかしてその子が？」

エイミスはサイゾウの横で縮こまつてる茶髪でポニーテールの新人社員に対して話題を切った。ちなみにメリルは謎の機体を調べるためこの場にはいない

「じ、自己紹介が遅れて申し訳ありませんでした！本日より特務三課の配属になりましたラミイ・アマサキと言います！至らぬ所もありますがよろしくお願ひします！」

「アマサキ……？」

「ええ、彼女は私の娘です」

それを聞いたエイミスは淀みなく疑問を口にする

「コネ？」

「違いますよ!!」

失礼すぎる言葉にラミイは即切り返す

「落ち着いてくださいラミイクン」

「でもお父さん……!」

「そういうのもなしです。会社に入った以上、社会人としての区別をつけなければコネと言われても否定できないじゃないですか」

「うっ……ごめんなさい……じゃなくて申し訳ありません、課長」

アマサキに言われ言葉を訂正する娘ラミイ。それを見ていたサイゾウはエイミスに話しかける

「ミス・ストレートの名は伊達ではないようだな。こうも聞きにくいことをストレートに聞きに来るとは」

「……このクセは私もどうにかしたいとは思いますが、親子だなんて聞いたら邪推してしまうのも無理がないと思いますが」

「まったく、先が思いやられるな」

「ビー! ビー! ビー!」

「け、警報? 火事ですか?」

「これって…」

「レベルAの警報だな」

「レベルA…?」

サイゾウのレベルAという単語にラミイは首をかしげる

「当社に対して直接的な攻撃が加えられる可能性が高い場合に発令されます」

「ええっ!？」

「会社説明会でも話があったでしょう? 大きい会社ですので、こういうったこともある…と」

いきなり攻撃されると言われてオタオタしだすラミイ。しかしそこで1つの疑問が浮かぶ

「あれ…? いやあなんでさっきの時は警報が鳴らなかったのでしょうか…?」

さっきのこと…謎の機体が会社に突っ込んできた出来事である

「VTXユニオンは事故にせよ故意にせよ、設備に直接的な被害が被る場合警報が発令される。つまり、あの機体は何らかの手段で瞬間移動してきた後、突っ込んできたのだらう」

「な、なるほど…」

この疑問を解消したのはサイゾウだった。スラスラと出てくる答えにラミイは納得

するが、肝心の回答者は納得していなかった

(しかし、ボソソジャンプなどの瞬間移動法が技術として確立している以上、会社が対策をしていないわけがない…一体どうやって…)

「失礼します!」

そう考えている中、第一試験場に慌ただしく入ってくる人が。ブラスタを調べていたメリルだった

「メリルくんですか。先ほどの警報を聞いてやってきたというわけですね」

「いえ、警報を聞いたのはこちらを向かっている最中です。あの機体を調べていたのですが、とんでもないもので…!」

「すみませんが、その報告は後にしましょう。今はレベルAの警報をどうにかする方が先です」

「しかし…!」

「そこまでにしておけ。今は緊急事態だ」

止められても洩るメリルをサイゾウが止める

「でも、どうにかするってどうやって…」

「無論、我々が戦うのです。ちょうど新型機もありますしね」

「新型をサポートするための戦術支援機であるキャリアアクスは課長とメリルとエイミス

が乗ることになるだろう。そして…」

「？」

サイゾウは言葉を一旦区切ると、疑問符を浮かべるラミイを見ながら宣言する

「その新型機であるティラネードに乗るのは…俺とお前だ、新人」

「ええええええつ!!？」

宣言それを聞いたラミイは、今日悲鳴を上げた時よりも大声で叫ぶのだった

ビー！ビー！ビー！

「うっ……」

けたたましく鳴る警報。耳を通して頭に響く音は気絶していたクロウの意識を覚醒させた

清潔な白いベッドで寝ていたクロウは、頭を片手で押さえながらゆっくりと起き上がる

「…どうやら誰かが俺を助けてくれたみたいだな」

ベッド周りのカーテンを開けて今いる場所が医務室なのだあたりをつけると、見ず知らずの自分を助けてくれた誰かに対して感謝した

「だがこの警報…どうやら良くねえことが起こってる感じだな」

同時にサイレンのように全体に響く警報をクロウはそう捉えた。すぐに医務室から出て近くの窓から外を見ると、多く建ち並ぶ施設やビルが敷地内に広がっていた

そして、その外側から聞こえてくる戦闘音も耳にする

「このままだとマズイな…！」

遠目に見ても敵と思わしき影は大群。それに立ち向かっているのは少数の人型機動兵器と一機の支援機。立ち回りはうまいが持久戦になれば疲弊していくのは目に見えていた

コオオオオオ…

その時、クロウは自身と共鳴する力の波動を感じ取った。それは自分の相棒が放つ力と同じ

「この感覚はスフィア…!?ブラスタが近くにあるのか!？」

スフィアの力を感じ取ったクロウは、その感覚のもとに向かつて会社内を走り出す。走ることに5分、クロウは誰もいないある巨大な格納庫にたどり着いた。そこにはクロウ・ブルーストの相棒、リ・ブラスタTが翠の光を放ちながら立っていた

「かなりボロボロの状態だな…だが駆動系が無事ならまだ動けるはずだ！」

そう言つてリ・ブラスタのコックピットを開けて乗り込んだ。コックピット内のダ

メージは殆どなく、問題なくブラスタは起動された

そのままリ・ブラスタを動かそうとした時

ピピッ

急にモニターからある動画が流れ出した

『この映像が流れてるってことは、とりあえずあんたとブラスタは無事ってことだね』

「チーフ!？」

そこには狐のお面で半分顔を隠すおキツネ博士ことトライアが映っていた

『ああ、悪いけどこれは緊急用のために撮っておいた録画映像だ。あんたの質問には答えられないから簡潔に言うよ。この映像はリ・ブラスタTの外装ダメージが70%を超えたら流れるように仕組んでいる。つまりあんたは今、リ・ブラスタTがほとんど動かさない状況ってわけだ』

トライアの説明をクロウは黙って聞く

『その状況に想定したシステムを私は108パターン用意した』

「そんなに!？」

周到過ぎる準備にクロウは驚きで叫んだ

『———というのは冗談だ。元氣そうなツッコミで何よりだよ』

「緊急用の映像で遊んでんじゃねえよ!」

今度は怒りで叫ぶクロウだった

『さて、真面目に説明しようか。あんたの危機的状況を打開する方法がこれだ』

ピピピッ

「これは……！」

モニターに流れたシステムを見たクロウは、自分の上司の用意周到さに言葉を失った

一方、VTXユニオンの周辺では戦いが長く続いていた

「しゅ、主任！また敵が来ましたよ！」

「テロリストにしては随分数を用意してきたな。このやる気を社会に活かせばいいものを」

「軽口言っている場合じゃないですよ!? エネルギーも弾薬も半分を切っているんですからー！」

「まだ半分も残っている！ 気合いを入れる新人！」

黒い外装のスマートなボディ、肩に半分に折ったステルス機のような翼をつけた新型機動兵器の試作機「ティラネード」が上空を飛び交いながらマグナ・ビーム・ランチャーで敵機を撃破する。サポートする形でティラネードに乗っているラミイがサイゾウに

向かって言うが聞く耳持たずだ

「ふん！」

「せいやあ！」

「トウツ！」

少し離れた地点ではV字の赤い翼と胸部の放熱板が特徴の「グレートマジンガー」とそれに類似したマシン「イチナナ式」、そして3つの乗り物が合体してロボットとなった超AI搭載型ロボット「ビッグボルフォッグ」が、連邦軍の援軍としてそれぞれ戦闘を繰り広げていた

「鉄也さん！この数だと向こうの俺の部隊もやばいかもしれない！」

「シロー！お前は向こうの援護に行け！こっちはまだ何とかなるが、向こうはそうはいかん！」

「わ、分かった。気をつけてくれ鉄也さん！」

イチナナ式に乗っていた青年シローはグレートマジンガーを見てそう言うと、その場から戦線離脱した

しかし敵のまだ多い。下半身の横に腕をつけたような「ゼグード」や黄色い「バッター」と呼ばれるにピッタリな無人兵器、胴体（というよりほぼ胸部）が横長い青い人型ロボット「マジン」などが存在している

バツタとマシンガンとビームを同時に発射するのをそれぞれ回避する3機。その後方の総合戦術支援機「キャリアクス」にはそれぞれアマサキ、メリル、エイミスが乗っていた

「課長、このままではジリ貧ですよ！」

「大丈夫ですよ、戦いが長引けば不利になるのは向こうの方です。連邦軍からのさらなる援軍も到着するはずですよ」

「でもエネルギーが先に尽きたら……！」

そうなればテイラネードは動けなくなり、動けないのをいいことに袋叩きに遭うのが目に見えていた。そうなれば特務三課の仕事は失敗したことになることは明白だ

何かできることはないかとメリルは考えを巡らせ……

ザザツ……

『そこにあんたら、聞こえてるか？』

「え……？」

「だ、誰?!」

突如聞こえてきたオープン回線に困惑するメリルとエイミス。そのまま回線から声は聞こえ続ける

『今あんたらが非常にマズイ状況だというのは分かっている。助けてくれた礼として、

俺も手助けさせてもらうぜ』

「助けてくれた礼……？」

「もしかして、あの銀色の機体の……？」

『緊急なんで格納庫を無理やり突っ切る！離れてろよ！』

「え!？」

そう言われてキャリアアクスにいた3人は視線を第二試験場格納庫へ向ける

ガシヤアアアン!!!

そして巨大なシャッターを突き破って……それは現れた

一対の機翼を背負った銀色の細身、右手に電磁加速式ガンランチャー、左腕の大型シールドを前面に構え、そして機体の中心につけられた翠のクリスタル

それはクロウが最初に出会った時の姿そのままの相棒、D次元獣Mバスター試作機1号機「ブラスタ」だった

初陣

格納庫から頑丈なシャッターを傷一つなく突き破った銀色の機動兵器は翠色のツインアイで敵を捕捉する。その中でクロウは感嘆の言葉を漏らす

「驚いたぜ。まさかブラスタをそのまんま中に隠していたとはな」

そう、トライアは万が一に備えてブラスタにリ・ブラスタTの外装をつけることでパーツできる仕組みを組み込んで制作していたのだ。格納庫で損傷したり・ブラスタTのパーツを全てパーツしたこと内側から新品同様のブラスタが姿を現れる

『見た目はブラスタだが、武器の出力や機体性能はリ・ブラスタを少し下回る程度さ。SPIGOTは小型のを4機背部に収納しているから運用は変わるが問題ないだろう？』

「ありがとよチーフ。CDSもバッチリ使えそうだ」

『とはいえ、帰る手段がないと考えると大事に使いな。壊したら承知しないよ』

プツン！

「安心しな！借金がほぼ完済済みの俺はそんなヘマしねえぜ！」

そんな哀しい事実を口にしつつ、クロウはブラスタを敵機の軍勢に向かって盾を構え

ながら突っ込んだ

ギューン!

「は、速い!」

「この速度…ティラネードを圧倒的に上回っている…」

マジンやバツタが撃墜すべくビームとマシンガンの弾幕を張るが、盾を使うまでもなくヒョイヒョイ躲す

「食らいな!」

ダダダダダ!

クロウは右手のAX—99RAPTORラプターの長い砲塔をパージされて出来たAX—99EAGLEイーグルを構え、まず近くにいるゼグド助にスフィア力源が生み出す次元力エネルギーを弾丸に変

えて撃ち込む

すると命中した2機は簡単に風穴を開けられて爆散した

「ムウ、なんとという火力!」

「しかも全弾命中…乗り手も良い腕をしている」

ビッグボルフオッグはブラスタの火力、鉄也はクロウの操縦技術の高さに注目する

「こちらにも負けていられないな!」

「ひゃあああ!!主任、スピード出し過ぎです!」

負けじとサイゾウもティラネードをさらに加速させて敵を撃破する。そしてとぼつちりを受けるラムイ

しかしテロリストの機体はまだ20体前後は残っていた

ダダダダダ!

そんな中、テロリストの機体の1つが撃った機銃の流れ弾が会社敷地内の施設に向かう

「!!」

「マズい!」

それを察知したクロウとサイゾウは弾幕の射線に入る。そしてクロウはバンカー、サイゾウはビーム・ベイオットを盾にして弾幕を防いだ

バンカーは表面から発生するフィールドのおかげで無傷だが、ビーム・ベイオットの方は決して無視できないダメージを受けてしまった

「し、主任!壊れましたよ!どうすれば!」

「落ち着け。敵を早く撃退すればいい」

「でもその武器が……!」

「ここは俺に任せな」

そこで会話に割り込んできたのはクロウだった。オープン回線でそれだけ伝えると、

一気にプラスタを加速させて、もつとも敵が集まっている方へ向かう

敵を多く、かつ素早く片付ける必要のある状況…それを解決する戦術を実行するために

「いくぜーアサルトコンバットパターン・ファイズー！」

グレネード弾のカートリッジに交換して敵の密集地に撃ち込む。即座にアサルトカートリッジに切り替える

直後に左半身を大きく引いて左腕を突き出す。すると左腕のシールド、バンカーの先端が発射され、残ったシールドと繋がったワイヤーがぐんぐん伸びていく

「ターゲットを中央に固定ー！」

発射されたグレネードは多くの敵を巻き込んで爆発、そして追い討ちをかけるようにバンカーが敵機の1体に深々と突き刺さる

「そのまま一気に火力を集中…！」

そのバンカーがワイヤーを引っ張り、遠心力で敵の周囲を旋回しながら蜂の巣にする
「とどめはド真ん中のストレートー！」

最後にSPIGOTTスピゴット（輪状の遠隔操作型武装）の1機を銃口に重ねると銃口からエネルギーの刃が槍状に伸びて…そのまま敵陣に突撃して貫通

「呆れるほどに有効…かつ最高の戦術だぜ！」

この戦術を生み出したある特殊部隊の隊長のことを思い出し、最後の言葉と共に脳裏にしまった

あれだけいた数多くの敵は、たった1機のたった1度の攻撃で一気にひっくり返された

「て、敵機…8割以上が撃墜です…」

「な、なんてデタラメな機体…」

メリルとエイミスはブラスタの圧倒的過ぎる性能に啞然とする

「主任、形勢が一気に逆転しましたよ！」

「ああ、そうだな…」

「な、何か嬉しくなさそうですね…」

テイラネードに乗っているラミイはサイゾウの反応を訝しく思うが

「テイラネードのプレゼンが完全にあの機体のインパクトで塗り潰された。かなり由々しき事態だからな…」

「命が助かったことを素直に喜んでください！」

どこまでも業務に命をかける主任を見て、やっぱり何も変わってなかったと思うのだった

ブラスタによって逆転した状況を見て、何より圧倒的スピードと火力を持つブラスタ

を見たテロリストたちは、脇目も振らず逃走していった

「敵機、全て撤退していききました」

「あの機体が来なければ何かしらの被害があったかもしれませんが。そういう意味では今日は幸運な日でしたね」

「機体が突っ込んできたりテロリストに襲われるのは幸運だとは思えません」

「そこはほら、ポジティブにいきましょう」

ポジティブすぎるわよ、とメリルは思った

「その2つの機体がVTXユニオンの開発した新型ですか…」

戦闘が終了したので、援護に来ていたビッグボルフオッグはテイラネードとプラスタの両方を見て言う

「正確にはこちらの機体だ。向こうの機体は我々VTXユニオンとは無関係だ」

「…なるほど。何か事情があるのですね」

サイゾウの物言いに察したビッグボルフオッグはそれ以上のことは追求してこなかった

「この新型機の名はテイラネードだ。完成した暁には、ぜひともご用命を」

「了解しました。その旨、報告させていただきます」

サイゾウの宣伝を聞いたビッグボルフオッグはそう答えると戦線を離脱するべく移

動する

「では、失礼します」

そう言つてビッグボルフォッグは離れていった

「よかったですね、主任。売り込みに成功したみたいです」

「いや、間違いなくティラネードよりもあの機体の方が印象に残っているだろう。何かしらの手を考える必要があるな…」

「主任、助けてくれた人を商売敵として見るのはやめたほうがいいと思います…」

仕事に情熱的過ぎる上司に億劫となるラミイであった

「剣鉄也さん、ご支援ありがとうございます」

「いえ、俺がここに來たのは、あなた方特務三課に協力するためでもありますから」

「え…」

「グレートマジンガーが私たちに…?」

（なるほど…社長からのアシストというわけですか…）

メリルとエイミスはそれを聞いて驚くが、アマサキだけがその意図を理解していた
そんな中、クロウはティラネードとキャリアアックスに近づいた

「よう、無事か？」

「ありがとうございます。今回のご支援、特務三課を代表して感謝いたします」

「気にしないでくれ。次元震に巻き込まれた俺を助けてくれたのはあんたたちなんだろう？ だったら恩人の危機くらい助けるさ」

「次元震……？」

聞き覚えのないワードにエイミスはメリルを見るが、メリルも首を振る

「主任、次元震ってなんですか？」

「いや、俺も初めて聞く」

「主任も知らないんですか？」

このなんでも知ってそうなサイゾウですら知らないことがあった方にビックリするラミイだった

「……やっぱり完全に俺の知らない世界みたいだな……しかも超次元世界のことも知らないのか……」

「え……？」

「知らない世界……あなた何を言ってるの？」

急にトンチンカンなことを言い出したクロウにメリルが問い詰める。どう答えるべきかクロウは迷い……

「あ……実は俺はだな……」

『その説明は私に任せな』

「どわっ!？」

話に飛び込んできた聞き覚えのある声にクロウは驚きの声をあげた。なぜならコックピットのモニターには再びおキツネ博士が映っていたのだから

「チーフ!?!なんでモニターに映っていやがるんだ!？」

『あなたが別の並行世界に跳ばされても連絡が取れるようブラスタに細工したからに決まってるだろ?!しかし今回は超次元世界とは異なる並行世界だったからね、僅かな次元の穴を探すのに少し時間がかかったんだよ』

スラスラと出てくるトライアの説明に絶句する。ただしそれはクロウではなく…

「へ、並行世界…?」

「…まさか、あなた方は…」

これまでの情報からサイゾウが導き出した答え…それをトライアが答えた

『察しがいいね。そのブラスタに乗っているクロウは、私たちのいる超次元世界からやってきた……いわゆる別世界の人間さ』

一瞬の沈黙

「ええええええええええええっ!!!?」

ラミイは、今日何度も叫んだ時よりも…恐らくこの先の人生でも絶対超える日がないというくらい音量で絶叫した

100万Gの男

VTXユニオン第一試験場格納庫…

「いやあ、今日は本当に驚きの連続ですね」

「もう…驚きという言葉では表しきれません…」

「正直、頭の中がついていけないわ…」

「同感です…」

変わった感じがしないアマサキとは反対に、ラミイもメリルもエイミスも完全に疲れ切った顔をしていた

「超次元世界…無数の並行世界が集まって出来た世界…そしてその世界からやってきた住人か」

「3時間前の周辺の観測情報のログを調べてみたところ、確かに異常な重力波の変化を感知していました。おそらくそれが次元震とやらの現象みたいですね」

（ボソソジャンプとも位相差空間ゲートとも違う転移…あの時警報が鳴らなかったのは全く未知の転移だったからか）

謎が完全に解けたあたりで、テイラネードとグレートマジンガーの間に立っているブ

ラストから1人の男が端末を持ってやってきた。青よりの黒髪に癖つ毛気味の髪型とタレ目な紫色の瞳、緑色のコートが特徴の青年

クールな二枚目、それが特務三課の見たクロウ・ブルーストの第一印象だった

(あら、結構イケてるじゃない)

メリル的にクロウの容姿はドンピシャらしい

「あなたがあの機体のパイロットですね？ 私は株式会社VTXユニオン特務三課の課長を務めております、アマサキと申します。特務三課を代表して、改めて礼を言わせてもらいます」

「私は特務三課主任のトキトウと申します。先ほどの援護、助かりました」

「スコート・ラボ所属のクロウ・ブルーストだ。…と言っても、この世界じゃ意味のない肩書きだけだな。それでこっちが俺の雇い主の」

『トライア・スコートだ。よろしく頼む』

4人が顔を合わせて(1人は映像越しだが)互いに自己紹介をする

「あとさつきも言ったが、俺は恩人のあんたたちを助けたくて助けたんだ。だから堅苦しいのはなしで、気軽にクロウって呼んでくれ」

「分かりました。これからよろしくお願ひします、クロウくん」

「ならば俺もサイゾウでいい。よろしく頼むぞ、クロウ」

「よろしくな」

上司たちの自己紹介が終わったところで、部下たちの自己紹介が始まる

「彼女らはそれぞれ技術課、総務から転属、そして新入社員として特務三課に所属している私の部下です」

「メリルと言います。テイラネードの整備とキャリアアクスのオペレーターを務めています」

「エイミス・アーネストです。特務三課の庶務全般とキャリアアクスの通信・索敵を担当しています」

「本日入社しましたラミイ・アマサキと言います！至らぬ点多いと思いますが、よろしくお願いします！」

「お、おう……よろしく……」

気迫あるラミイの自己紹介にクロウは困惑

そしてラミイの名前を聞き逃さない者がいた。メリルである

「アマサキ……？もしかして……」

「メリルくんの想像通り、ラミイくんは私の娘です」

「……………」

課長の返答を聞いて表情を変えるメリル。明らかに不満を抱いている顔だった。何

か作爲的なことをして入社したのではないか、といった

そこにクロウが割り込む

「ちよつといいか？」

「…なんですか？」

「あなたの不満な気持ちは分かる。自分は努力したのに、って思ってしまうからな」

「それは…」

「でも、ラミイだってそれは分かっているはずだ。親と同じ会社に入るんだ、どうしたって怪しまれることぐらいな」

そこで俯いてるラミイを向く

「俺の仲間にも双子の兄の名前を受け継ごうとして比べられてる奴がいたんだ。でも、そいつはそれでも覚悟を決めて戦い続けた…お前さんもやりたいことがあってここに来たんだろ？」

「はい…でも、ここじゃあそれも出来なくて…」

「それがどうした」

ラミイの抱える不安をクロウが取り除く

「え…？」

「出来ないなら探せばいい。見つからないなら作ればいい。諦めなければなんとかなる

もんさ」

ラミイはその言葉を聞いて、不思議と気が楽になった。きっとそれは、この人の言葉が飾り気のないものだからだろうとなんとなく思った

「…そうですね…私、頑張ってみます！」

「その意気だ」

「ありがとうございます、クロウさん！」

すっかり元気になったラミイは快活な笑顔を浮かべた

「いやあ、クロウくん、なかなか良いことを言いますね」

「ええ。思わず聞き入ってしまったほどです」

そのやり取りを見ていたサイゾウとアマサキは微笑ましいものを見る目をし

（顔も良いし性格も良いし、パイロットとしての腕も一流…野獣ネクタイとは大違いね…！）

（メリルさん、飢えた獣みたいな目をしてる…）

クロウに見入るメリルにちよっぴり引くエイミスだった

そんな中、クロウに近寄って話しかける男が

「最後は俺だな」

「お前さんがあのマジンガーのパイロットか？」

「そうだ。地球連邦でグレートマジンガーのパイロットをしている剣鉄也だ。よろしく頼む」

「剣鉄也…あんたがか…」

「俺のことを知っているのか？」

今日この世界に来たばかりのクロウが鉄也のことを知っているような言い方に疑問を浮かべる

「その辺の話は後にしよう。長くなるだろうからな」

「そうか、分かった」

クロウがそう言ったのもあつて鉄也も言及してこなかった

「さて、自己紹介も終わったところでクロウくん、君に話があります」

「俺に？」

アマサキが何かを告げようとした刹那、クロウは悪寒と共に鳥肌がたつた…

「実はですね、君がここにやってきた時に機体を会社に突っ込ませたことと第二試験場の格納庫のシャッターを無理やり突き破ったこと…その両方の弁償を君に請求しなければならなかったのですよ」

「!!」

“弁償” “請求”。この2ワードだけでクロウは自分がどういいう状況に置かれてい

るのかを悟った

「しかし、先ほど君が来る前にトライアさんと話をして、社長に連絡をしてみた結果、君の機体からパーズされたパーツを譲ってもらうことでその負債を無しにするということになりました」

「チーフ、いつの間にそんな話を!？」

『あんたにブラスタの中に仕込んでいた端末を探させてた時にだよ』

「いやあ、いきなりこちら側に連絡が来た時は驚きましたよ。異世界の技術ってすごいですね」

アマサキは呑気なことを言うがクロウはそれどころではなかった

『つまり、今私はあんたの支払いを肩代わりしてやったわけだ。もう分かっているだろう?』

「…幾らなんだ?」

『そうだね。今回は事故ってところも考慮して…』

カシャカシャカシャ チーン!

『返済額は100万Gってところだね』

「ひやくまんんんっ!!」

その瞬間、クロウの脳内の借金方程式が崩壊した

『これでも半額にしておいたんだから、感謝しなよ?』

「その金額のどこに事故の点が考慮されてんだ!？」

『少なくとも格納庫は自分で突き破ったと聞いたよ』

「そ、それは…」

痛い点を突かれてタジタジするクロウ

そこにラミイがトライアに質問をする

「あの…100万Gってどれくらいの額なのですか?」

『ああ、あんたたちの世界の金の単位はT\$だったね。そうだね…そつちの世界でもわかりやすく例えるなら、宝クジの1等を2、3回は当てたくらいの額だね』

「ちなみにT\$に換算すると1億T\$ほどですね」

アマサキ課長から聞かされた金額を聞いた女性陣は、全員そろって耳を疑った
「えええつ!? そんなにですか!？」

とラミイ

「中小企業の総資産より圧倒的に上!」

とメリル

「それを個人で!」

とエイミス

それぞれ3人の感想を聞いたトライアは、呆れるようにクロウに言う

『全く、本当にどこまでもブレないね、「100万Gの男」』

『好きで借金作ってんじゃねえよ!』

それに対して反論するクロウだが、またもや気になる単語がトライアの口から出てきた

「トライアさん…「100万Gの男」って、ひよつとして…?」

『察しの通り、こいつは100万Gの借金を作っては返してるのさ。それこそ何回もね』

「な、何回も…」

『言つとくけど、別にクロウに問題があつて借金が出来るわけじゃないよ。そう言う星のもとで生まれてきたとしか表現のしようがないだけさ』

「クロウがそんな男でないことは俺も分かる。そんな奴ならばわざわざ借金を返すわけがないからな」

そうフォローしたのは意外にもサイゾウだった

『良かったじゃないかクロウ。あんたのことを理解してくれる人がいて』

「…もう、何も言えねえ…」

サイゾウの評価に嬉しそうにするトライアだが、クロウは完全にノックアウトしてい

た

『とりあえず元の世界に帰還できる手段はこつちでどうにかするから、あんたは当分特務三課のプロジェクトとやらに参加しな。そつちの世界は相当荒れてるみたいだからね、機体データや戦闘データを集めやすいだろう』

「つまり、クロウを派遣社員としてウチに派遣すると受け取ってよろしいですね」
『その通りだ。しつかりこき使っておくれよ』

「ええ。VTX魂をしつかり叩き込んでやります」

意気消沈するクロウの横でそう約束し、いい笑顔をするサイゾウ

(これからどうなっていくの、私…)

それを見ながらラミィは自分の未来の行く末に不安を抱くのだった…

特務一課の挑戦

違う^ズ世界の者^ト同士が出会い、苦勞（誤字にあらず）が再び100万Gの男となった日の翌日…

「おはようございます」

メリルは朝早く特務三課の職場である第一試験場格納庫に到着していた。きつとすでにアマサキ課長とトキトウ主任がいるだろうと踏んでいた

「おはようさん」

「おはよう」

「おはようございます、メリルさん」

しかしそこに上司2人の姿はなく、代わりにいたのはクロウ・ブルースト、剣鉄也、ラミイ・アマサキの2人だった。クロウの手元には端末がある

「…随分とお早いですね、クロウさん」

正直言えば、自他に厳しい鉄也や新人ゆえに張り切るラミイはともかく、昨日の最後で完全にクロウに対して借金人間なイメージがついたメリルからすれば、こんな朝早くから来ているとは思っていなかったのだ

「職業柄早く起きることもあったからな。あと、敬語で話さなくてもいいぜ。今じゃ俺もこの特務三課メンバーの一員なんだ」

「分かったわ、クロウ」

この段階でメリルの中で昨日のクロウの第一印象は消え失せていた。借金持ちで飄々とした感じだが、意外と情に厚く話しやすい。クロウに対してかなり好印象なメリルだった

（仕事主義過ぎる主任よりはずっと相手しやすいわ…）

どうやら上司のせいで好感のグレードが下がってただけのようである

「課長と主任は？」

「主任と課長は少し前に大事な電話が来たらしくて、話をするために席を外しましたよ」
メリルの質問に答えたのはラミイだ。理由を聞いて納得すると、今度は3人が何をしているのが気になった

「それで、何をしているの？」

「私と鉄也さんで、この世界の歴史とかについてをクロウさんに教えていました」

「そっか…：そういうえば昨日この世界に来たばかりだものね」

端末を弄ってるクロウに納得するメリル

「しかし今だに信じられないわね…：並行世界なんてものが存在して、しかもそこから来

た人なんて」

「そうですね」

「でも正直に言うくと、別の世界の人間って言われて納得した自分もいるの。だってあのブラスタって機体、今まで見たどの技術系統とも違う上にすごく高度なもの。あれを組み上げたトライア博士には嫉妬するわ」

そう、特務三課のメンバーで一番並行世界の存在を認めていたのは他でもないメリルであった。一流の技術開発者だからこそブラスタの異質さがよく理解できていた

「しかし、退廃と諦めの『黄昏の時代』ね……この世界もこの世界で随分殺伐としているな」
一方でクロウは、ラミイたちから教えてもらった歴史の内容を見て深々と息を吐く
『黄昏の時代』。かつて宇宙進出と共に急激な文明の進歩と繁栄を誇った『黄金の時代』が、外宇宙の過酷な現実打ちのめされて人類の生活圏が太陽系内に押し止められた結果、地球圏は荒廃とした世界になった。それが現代まで続いたのが『黄昏の時代』であった

「この世界も……って、クロウさんの世界も戦いがあったんですか？」

「まあ、あんなに高度な機動兵器がある時点で想像はついてたけどね」

「皆さん、おはようございます」

そこにエイミスが挨拶しながらやってきた。4人はそれぞれ挨拶を返しながらエイ

ミスも会話に交ぜる

「おはようございます、エイミスさん」

「何の話をしているの？」

「クロウさんの世界について聞いていました」

「クロウさんのいた世界かあ…私も少し興味があるかな」

「そうだな…全部話すと長くなる。ここはかつて俺たちが戦った「破界の王　ガイオウ」という男のことを話そうか」

「「破界の王　ガイオウ」…」

クロウが口にした名前をラミイが反芻する

「なんだか強そうな名前です」

「実際に奴は強かった。なんせ初めて会った時には生身で戦艦にダメージを与えたからな」

「生身で!?!」

「人間じゃないわよ、それ…」

あまりに人間離れたガイオウの話にエイミスとメリルは開いた口が塞がらなかった

「ガイオウは全生命体の天敵と戦うための戦士だったらしい。…その戦いに負けたあい

つは記憶を失ったんだが、それでも戦うために力を集めることは覚えていてな。それである国に住む人間と機動兵器を次元獣って化け物に次々と変えて、その国を滅ぼしたら今度は俺たちの地球にやってきて、全世界に対して戦争を始めたんだ。ガイオウって名前もその時に名乗ったんだ」

「…なんだかスケールの大きい話ですね…」

「だがそれほどの戦いを経験していたのなら、クロウの技量の高さも納得がいく」

嘘をついてる風にも見えないのも理由の1つだった

「俺たちって言いしましたが、他の人と一緒に戦っていたのですか？」

「ああ…独立支援部隊ZEXIS^{ゼックス}。戦う理由はそれぞれだったが、みんな平和のために戦っていた」

「ふふ、クロウさんもでしょう」

平和のために戦う組織にいたのなら自然とクロウも同じように戦っていたのだろう。そう思ってたラミイだったのだが

「いや…借金返済のために戦っていた」

「そこでも借金!？」

「そもそもブラスタに乗ったきっかけも借金を返すためだったからな」

「ええ!？」

借金ワードのオンパレードにラミイは目眩がした。この人、どれだけ借金と縁があるのだと

「とにかくガイオウは俺たちの敵だった。でも、あいつも宇宙の平和のために戦った男だったってわけだ」

「そ、そうだったんですか…」

クロウは綺麗に収めたつもりだったが全然収まってなかった。どんな顔をすればいいのか、分からなくなる女性陣であった

「クロウ、1つ聞きたいことがある」

そんな状況で鉄也が言葉を投げかけた

「お前は昨日、俺と初めて会ったにも関わらず何か昔のことを思い出すかのように話していた。昨日、初めてこの世界に来たのにだ。なぜ俺のことを知っていたんだ？」

「そのことか…」

聞いていたクロウは少しだけ黙る。そして少ししてから話を始めた

「俺のいた世界が並行世界の集まった世界ってのは話したよな」

「ああ」

「並行世界ってのは言ってしまうば、俺たちの世界とは違う未来や歴史を辿った俺たちの世界ってことだ。だから俺たちの世界と全く違う並行世界もあればほんの少し違う

だけの並行世界もある」

「それって…」

「並行世界の同一人物か」

その答えを出したのは質問してきた鉄也だった

「分かってたのか？」

「なんとなくな」

「なら話は早い。俺は元の世界で剣鉄也の話を知ることがあった…だからあんたのことが分かったってわけだ」

「もしや兜甲児のことも知っているのか？」

「ああ…つつても、この世界の甲児は俺の知ってるあいつより大人みたいだがな」

先ほど歴史を教えてもらった時、自分たちが戦ったはずのハーデス神やミケーネの神々のことが存在してなかったこと、逆に自分たちが戦ってない暗黒大將軍の存在などから、この世界のマジンガーは自分たちとは違う未来を辿った世界のマジンガーなのだろうと考えていた

「鉄也さんの同一人物ね…私たちの同一人物もいるなら会ってみたいものだわ」

「でも、並行世界の同一人物って出会ったら重なった後にバラバラのスポンジ状になって死んじゃうんじゃない？」

「落ち着いて、ラミイ」

変な知識を受信したラミイを落ち着かせるエイミス

「そんなことは起きねえよ。それどころか全並行世界の自分自身を1つの体に統合した奴がいるくらいだからな」

「そんな人がいたんですか!?!」

その人物とは言うも憚る究極ジュ・エーデル・ベルナルの変態なのだが、その話題はまた別の機会にしておこう

コッ コッ コッ

「メリルくん、エイミスくん、おはようございます。皆さん揃っていますね」

「2人とも、おはよう」

「おはようございます、課長、主任」

「おはようございます」

そこにアマサキとサイゾウが一緒にやってきた。今日初めて顔を合わせたメリルとエイミスに挨拶する上司2人に、部下2人も挨拶する

「さて、昨日は忙しくて出来ませんでした、まず自己紹介をしてもらいます。クロウくん」

「分かった」

アマサキが声をかけるとクロウはみんなの前に出てくる

「昨日社長に許可をもらい、トライア博士と話し合った結果、クロウくんをVTXユニオン特務三課に派遣社員として所属することになりました。…と言っても、派遣社員はあくまでこの世界での彼の立場を明確にするための建前です。なので彼はスコート・ラボ所属のままと捉えてもらって構いません」

「特務三課へようこそ。歓迎するぞ、クロウ」

「改めてよろしく頼むぜ、サイゾウ」

「ああ」

（主任、嬉しそうですね…）

（仕事一筋の人だと思ってたけど、あんな顔もするのね…）

噂や昨日とは違う顔を見せるサイゾウの姿にちよっぴり驚くエイミスとメリルの2人

「さて、本来ならば今から業務を開始する予定だったのですが、その前に刺激的なイベントをすることになりました」

「刺激的…ですか？」

アマサキ主任の言葉に首をかしげるラミイに、サイゾウは不敵な笑みを浮かべながらイベント内容を口にする

「特務一課からの挑戦状だ」

ゲシユペンスト

VTXユニオン社付近の森林地帯。そこにテイラネードと相対するように1つの機体が宙を浮いていた

全体的に丸みの帯びた漆黒のフォルムに頭部にはウサギの耳のように伸びた長いセンサー。左前腕の側面には各種武装に設定される3本の円柱状の突起が突き出しており、背面には飛行機の水平翼とジェットエンジンのノズルを組み合わせたようなスラストターを持つ

「お疲れ様です。特務一課のサギリ・サクライです」

すると漆黒の機体から若い女性の声が聞こえてきた

サギリと名乗った女性の声を聞いて、相対していたテイラネードに乗るサイゾウが反応する

「サクライ…お前か…」

「お知り合いなんですか？」

「サギリ・サクライ…通称『特務一課の堕天使』…」

「堕天使…!？」

随分と物騒な呼称にラミイは驚く

「俺と同期入社でもある」

そう、サイゾウとサギリの2人は同じ時期にVTXユニオンに入社した社員同士であつたのだ

「久しぶりねトキトウくん。とりあえず、昇進おめでと」

顔見知り同士だから、サギリも気兼ねなくサイゾウに話しかける

しかし、その柔らかい雰囲気は一気に変わる。まるで蛇が獲物を付け狙うかのように「でも残念……！今日で特務三課が解散になるからすぐ降格になっちゃうけど」

「解散……!?特務三課が!?!」

唐突なサギリの宣言に困惑するラミイ。そんな新人に説明すべくサイゾウが語り始める

「プロジェクトTNDは地球連邦軍の次期量産機コンペに提出する機体の開発だ。だが、その前段階として複数の機体が社内コンペにかけられていた」

「そしてその最有力候補だったのが、私の乗っているこのゲシユペンストよ」

「ゲシユペンスト……」

「元々、次期量産機コンペは特務一課が担当するはずだったのに、土壇場で横からかすめ取られたんでうちとしては収まりがつかないわけ」

特務三課が課せられた業務の内容こそプロジェクトTNDの完了：即ちティラネードを完成させることである。しかし、本来ならばティラネードではない機体はその役目を務めるはずだったのであった

それがこの「ゲシユペンスト」。ドイツ語で「幽霊」の意味を持つその機体は、漆黒に包まれた色合いで揺れる姿にピツタリな名前といえた

「それで現場を不満を収めるためにうちのティラネードを潰しに来たのか」

「おたくの課長さんも承認した以上、ここで私が勝ったら大人しく社長に失敗の報告をしてもらおうよ」

つまり、ティラネードを打ち倒しゲシユペンストの方が優秀だということを知らしめる。それが特務一課の挑戦状の内容である

「お前が勝つたらな」

そんなサギリの不敵な発言に挑発で返すが、サギリはサイズウの挑発に乗らない

「悪いけど強いわよ、私もゲシユペンストも。ただ強いだけじゃなく、高い拡張性の証として今回は修理装置まで装備してきたのよ」

「しゅ、主任……どうするんですか!？」

「こども自信満々に来られては不安にもなるのか、ラミイがサイズウにそう聞く

「業務内容は向こうが説明した通りだ。聞いてなかったのか？」

「じゃあ、戦うんですか!？」

「模擬戦だ、負けても死にはしない。もつとも…プロジェクトを奪われればサラリーマンとしては死ぬがな」

「サラリーマンの死…」

サイゾウの言葉は実に重みがあった

「心配しないで、ラミイ・アマサキちゃん。特務三課が解散になれば、あなたは当初の予定通り戦術研究課に行けるから」

「!」

「何となく分かるわよ。あなた…三課に配属されたことに不満があるんじゃない?」

「…確かにサクライさんの言う通りです」

「ラミイ…」

サギリに指摘されたことをラミイは肯定した。サイゾウが黙って見ていると、ラミイはさらに口を開く

「でも、昨日教えてもらいました。やりたいことがあるならそこで探せばいいし、見つからなければ作ればいいって。少なくとも、不満だから特務三課を出ていけばいいって言うのは違うと思います」

「ラミイくん…」

「よく言った、ラミイ。それでこそ特務三課の一員だ」

「あら、思ってたよりしつかりしているのね。気持ちのいい新人ちゃんじゃない」
自分なりの答えを出した新人の姿にサイゾウたちやサギリが感心して

「…なあ、1つ聞いてもいいか？」

そんなタイミングで声をかけてきたのは、今まで終始無言のクロウであった

「どうした？」

「なんで俺もここにいるんだ？」

その質問の意味を理解するにはクロウの置かれた状況の説明が必要だろう

現在、クロウはブラスタに乗った状態でテイラネードとゲシユペンストの間に挟まる形…まるで試合の審判員のように配置されていた。それも誰からもなんの説明もなく

これだけでもうお察しである

「模擬戦である以上死ぬわけじゃない…だが課の存続がかかっている手前、本気で勝つ必要がある。場合によっては両機とも動けなくなる可能性を考慮してお前も出撃させたわけだ」

「…鉄也は？」

「社内の尻拭いを他人に任せるわけにはいかない。だから建前上は派遣社員であるお前に白羽の矢が立った」

つまり、クロウは面倒な役割を任されたということである

「フツ…これも貧乏クジの運命さだめってわけか…」

「何か、すごく悟っているわ…」

エイミスにそんなことを言われていることも気づかず、いつものこと貧乏クジに思わず笑っちゃうしかないクロウだった

「ところで彼は？」

「あいつはクロウ・ブルースト。昨日スコート・ラボからブラスタに乗って特務三課へ派遣されることになった」

「スコート・ラボ…？聞いたことがないわね…」

「気にすることはない」

「それもそうね。特務三課が解散しちやえば元の会社に戻るだけだし」

ブラスタのことが気になりはするが今は考えないようにするサギリ

「頼むぜサイゾウ…！ここで負けて特務三課が解散されれば路頭に迷うことになる。借金も返さずにラボに戻れば、鬼チーフに何を要求されるか分かったもんじゃねえ…！」

「必死ですね、クロウさん…」

借金のことになると思えば普段の余裕がウソのような必死ぶりにクロウの評価が若干下降したのだった

そんなこんなで余計な経緯があつたが、いよいよ特務三課VS特務一課のファイトが始まる

「じゃあ行くわよ……！恨みっこなしで！」

「トキトウ主任、サクライくん……残念ながら乱入者です」

しかし模擬戦が始まるその直後、狙つたかのようなタイミングで所属不明機が戦闘エリアに侵入してきた

「所属不明機、戦闘エリアに侵入！ネオ・ジオンと木星帝国ジュピター・エンバイアのモビルスーツもいます！

データ照合の結果、機動兵器を使用した強盗団のようです」

「そんな奴らにネオ・ジオンや木星帝国ジュピター・エンバイアが混じつてるなんて……！」

エイミスからの情報を聞いたメリルが忌々しげに呟く

「脱走兵なんでしょうね、多分……」

「比較的治安がいいと言われる日本ですが、こうも無法者が蔓延るとは……悲しいことです
すがこれも時代ということでしょうか……」

黄昏の時代ゆえの無法化に思わずアマサキもため息を吐く

「ご安心を、課長」

だが、それを聞いたサイゾウはテイラネードを強盗団たちの前に動かした

「何をするんですか主任!?も、もしかして……！」

「そのもしかしてだ」

サイゾウの行動と状況から考えれば、これから戦闘するとしか思えなかった

「地球連邦軍の次期制式採用機がセコハンに乗った山賊に負けるわけにはいかない。さっさと蹴散らして戦闘データになってもらう」

「き、昨日の今日でまた戦闘になるなんて……」

そうラミイが困惑していると、ティラネードたちの後方から鉄の勇者が姿を現す

「そういうことなら俺とグレートの出番だな」

「鉄也さん……！」

「なら俺も働かねえとな」

そんな鉄也を見て、クロウもプラスタをティラネードの隣に移動させた

「課長さんよ、聞きたいんだが……」

「大丈夫ですよクロウくん。VTXの勤務時間は9時から18時までですが、ちゃんと残業手当も深夜手当も支給されますよ」

「よしっ！それが聞けりゃあやる気が出るっつてもんだぜ！」

（守銭奴……）

ラミイははしやぐクロウを見て、そんな単語が頭に浮かぶ

「礼を言うぞ、クロウ、鉄也」

だが、とサイゾウはセリフを付け足す

「見せ場はティラネードにゆずつてもらう」

「特務三課の俺やクロウはそれでいいが、彼女は同意できないようだぞ」

当然それはゲシユペンストに乗るサギリ

「ちようどいいわ。ここで私とゲシユペンストの活躍を見せれば、連邦軍と社長へのい

いアピールになる」

「思考様式が主任と一緒……」

「ついでと言つてはなんだけど……」

ギユン！と黒い機体を木星帝国のモビルスーツ「バタラ」に接近させる。そして左前腕部に格納してあるビームサーベルを取り出し肉薄、撃墜するとそのまま元の場所に戻ってきた

「特務三課の皆さんにもゲシユペンストの力を見せてあげる」

早速一機倒したサギリはそう宣言した

「いいだろう。こちらも礼代わりにお前にティラネードの力を見せてやる」

「そんなこと言つてる場合じゃないと思います！」

「心配するな新人」

的外れなことを言うサイゾウに突っ込むラミイだが

「俺が守る」

「主任……」

サイゾウのその言葉に頬を染めた。この子チヨロすぎである
「そんじゃあ、悪党退治といくか！」

クロウの言葉を皮切りに、4機は強盗団と戦闘を開始した

目指すは火星

それぞれ強盗団の機体群に向かって加速するブラスタ、ティラネード、ゲシユペンスト、グレートマシンガー

『来るぞー!』

『撃て!撃てえー!』

ゲシユペンストの不意打ちですでに1機やられた強盗団は、敵意を向けながら銃口から一斉にマシンガンやビームを撃ち放つ

「よつと」

「ふっ」

「甘い甘い」

ブラスタ、ティラネード、ゲシユペンストの3機は弾幕の嵐を軽く回避し

「効かんな!」

キンキン!バシユウ!

『き、効いてない!?!』

グレートマシンガーは超合金ニューZの装甲によって、カスリ傷も通さずにまっすぐ

強盗団に突き進む

「喰らえ！ドリルプレッシャーパンチ!!」

『うわあああ!』

そしてプレッシャーカッターを展開した腕を突き出すと、ドリルのように回転したロケットパンチを発射。2機のゼグートに連続で風穴を開けて破壊する

「さすがグレートって名がつくだけあるな。ロケットパンチも一味違うぜ」

自分の知ってるロケットパンチよりも高い貫通力にグレートマジンガーの強さを実感するクロウ

クロウより先に突っ込んでいたサイゾウとサギリは、それぞれメガ・バスター・ストライカーとニュートロンビームで敵機を一撃で落としていく

「さてと、俺もやるか!」

『な、はッ、速い!』

千里の道も一歩から、100万Gも1Gからの精神でクロウは目の前のモビルスーツ、バタラと相対する。バタラはあまりに速すぎるブラスタの機動を捕捉できず、闇雲にビームライフルを撃ちまくるが見当違いな方向に消えていくだけである

やがてビームの雨が止む。バタラはビームライフルのトリガーをカチカチ引くがエネルギーが切れて発射されない

「隙だらけだぜ！」

その隙をクロウは見逃さず左腕のバンカーを前に出して高速接近、そしてすれ違いざまにバタラを斬りつけた

『ハ、この俺が何もできずに！』

上半身と下半身が泣き別れた機体は切断面から火花を散らして爆発した

「モビルスーツにしては随分脆いな…それに変わった見た目だ」

今まで戦ってきたどのモビルスーツと比べてもあっけない感覚にクロウは呟く。特殊環境下ゆえに一点特化の性能にする必要があり、そのために各パーツの換装を前提とした木星帝国製のモビルスーツの特徴を知らなかったゆえに出た呟きだ

バジユウ！バビユウ！

その時、背後から太いビームが2本迫ってきた。ブースターを吹かして回避したブラスタが振り返るとピンクの目立つ色が3つ森の上を浮いていた

「ネオ・ジオンの奴らか…この世界でも戦うことになるとはな」

『見たことのない機体だな』

『なんとしても撃墜させるぞ！』

天獄戦争でよく戦った量産モビルスーツ「ガザC」を目視したクロウは即座にEAG L Eを構え目標に向けて撃つ。3機のガザCは先ほど撃った大口徑ビーム砲、ナツクル

バスターでプラスタを撃った弾ごと蒸発させてやろうと放った

だが、プラスタのEAGLEはスフィアの次元力をエネルギー弾にしているため、高密度なエネルギー弾はナツクルバスターのビームに命中しても消えないどころか、逆にビームをかき消しながらガザC3機を穴だらけにする

『ビームをかき消し…ッ!?!』

『バカなあああつ!!』

ありえない光景に目を剥くパイロットの絶叫はガザCの爆発音の中に飲み込まれていくのだった

「恨むんなら悪事を働いた自分を恨むんだな」

撃墜された強盗団にクロウは聞こえない忠告をした

「なんてバカげた火力! 一体どここの企業なの…?」

そしてプラスタの異常な火力と機動性に思わず目を剥くサギリ

「サクライはプラスタに目がいつてる。今のうちに撃墜数を稼ごぞ」

そんなこんなで強盗団との戦闘が続き、10分が経過。敵機の数も残り少なくなってきた

「主任! 左前方より熱源反応です!」

「分かった!」

「トドメのニュートロンビーム!!」

ラミイの言葉を聞いたサイゾウはティラネードの位置をずらしてビームを回避し、そのまま残りの敵を撃ち落とした

同じくサギリもサイゾウが撃ち抜いた機体の近くにいたゼグートに風穴をあける

「同時撃破、か…」

最後の2機をまとめて撃破してやろうと思っていたサギリはどこか悔しそうに呟く

「ビジネスとは時間と気迫との勝負だ。俺は三課、お前は一課を背負っている以上、簡単に負けてやるわけにはいかない」

「時間はともかく、気迫って関係あるんですか?」

「あるぞ。残業確定なタスクを業務時間内に終わらせる時などにな」

「そんな話は聞きたくなかったです!」

サラリーマン、というより労働者の闇を意図せず垣間見てしまった新人ラミイ。彼女はまた一つ大人になったのであった

「強盗団の全滅を確認」

「あつという間に終わったわね」

「いやあ、皆さん本当に頼もしい限りですね」

「ありがとうございます」

アマサキの褒め言葉を受けたサイゾウは謝礼をする

「それで、サイゾウと奴さん^{サギリ}のどっちが勝ちなんだ？」

「間違えるなクロウ。これは俺とサクライ個人の戦いではなく、三課と一課の戦いだ」

「相変わらず真面目ね、トキトウくんって」

あくまでチームの一員として勝利にこだわるサイゾウにサギリは懐かしく感じた

「テイラネードとゲシユペンストの撃破数は同数の10機でした」

「てことは引き分けか」

「いい機体だな。テイラネードもゲシユペンストも」

「俺もそう思う」

「私もそれは認める」

鉄也のテイラネードとゲシユペンストへの評価にサイゾウもサギリも肯定する

「テイラネードと同じく、一課のゲシユペンストも多くの人たちの努力の結晶なんだろうな」

「そうよ…だからテイラネードに負けるわけにはいかないの」

「でしたらサクライくん…」

そこにアマサキがサギリにある提案をする

「あなたもプロジェクトTNDに参加しませんか？」

「え…」

アマサキの提案にサギリは目を丸くする

「ゲシュペンストとテイラネードの比較試験もプロジェクトTNDに必要な要素です。サクライくんさえ良ければ私の方から社長に報告しますが…」

「…そうですね。このまま引き分けのまま引き下がるのは一課のみんなに申し訳が立たないし…」

少し思考してからサギリは答えを口にした

「分かりました。私もプロジェクトTNDに参加させてもらいます」

「ありがとうございます。サクライくん、歓迎しますよ」

「でも私…次期量産機の座をテイラネードに譲る気はまったくありませんので」

そしてサイゾウの方に向き

「だからトキトウくん、プロジェクトTNDは特務一課のゲシュペンストのことで埋め尽くせてもらおうわ」

「あいにくだが、こちらも勝たせてやる気はさらさらない」

(い、一触即発の雰囲気…！)

居心地の悪さにすぐにでもテイラネードから降りたいとラミイは思った

しかし次の瞬間にはサイゾウは笑って言う

「だがそれ以外に関してならば歓迎するぞ、サクライ」

「そうね。よろしくお願いするわ、トキトウくん」

(ホツ…)

居心地の悪い雰囲気霧散したことでラミイはホツと息をつくのだった

「ちなみにクロウさんと鉄也さんは何機倒したのですか?」

話題転換のためにラミイはすぐさまそう聞くが、エイミスはちよつとためらう感じに黙ってから

「…クロウさんが24機、鉄也さんが13機よ」

「ウソ!？」

「本当ですか!？」

エイミスから聞いた撃墜数にサギリに加えてラミイも大きく驚愕した

「…剣鉄也は10年前、機械獣やインベーター、ジオンと戦った一年戦争の経験があるから分かるけど、その英雄に大きく引き離れた彼って何者なの?とても機体の性能だけとは思えないわ」

「俺たちもクロウの経歴は掻い摘んで聞いていたが、これほどのレベルだったとはな…」

「そうですね…」

「後ろから見えていたけど、鉄也さん以上にいろんな機体との混合戦に慣れている様子

だったわ」

「俺以上の修羅場をくぐり抜けてきたというわけか」

「……………?」

サギリのもつともな疑問にサイゾウ、ラミイ、メリル、鉄也が順番に答えるが、クロウの事情を知らないサギリは首をかしげるばかりだった

「その話は戻ってからでもいいでしょう」

「そうね。そっちの方が根掘り葉掘り聞けそうだし」

そう言いながらブラスタの視線を向けるサギリ。さらにクロウは、心なしか彼女が舌なめずりしてるようなイメージが浮かぶ

(……でも俺の女難は続くのか……)

逃れられない運命。それに対してクロウはただただ黙るしかなかった

「並行世界の人間ッ!!?」

時は進み場所は変わって、VTXユニオン第一試験場格納庫内

特務三課のプロジェクトに参加することになったサギリは早速クロウの事情を知るべくクロウに詰め寄った。タジタジになるもクロウは簡潔に自分が超多元世界出身の

並行世界の人間であることを説明した

その結果が冒頭のサギリの叫びである

「驚いているわね」

「ラミイと同じくらい驚いているんじゃない？」

「いや、ラミイの音量はあれの10倍以上はあった」

「冷静に分析しないでください主任！」

特務三課のメンバーはサギリの反応にそれぞれの思いを口にする。サイゾウのはラミイにしてみれば恥ずかしい過去を掘り返されているようなのでたまったものではないが

最初は驚いていたサギリだが、数分もすればもう気にせずにクロウに話しかけていた
「へえ、並行世界なんて本当にあるのね……」

「まあ、その辺は深く考えなくていい。今の俺は特務三課の一員だ」

「それもそうね。改めて言うけど、私の名前はサギリ・サクライ、よろしくね」

「クロウ・ブルーストだ。よろしく頼むぜ、サギリ」

互いに自己紹介が終わったところで、サギリは目を細めてクロウに近づくと

「じゃあ、その並行世界のことについて色々聞かせてもらえないかしら？」

「おう、そのうちな」

「今、聞かせてもらえないかしら？」

「いや、だからそのうち……」

ガシッ！

「ひー！」

いきなり肩を掴まれたクロウはどこぞの外務大臣のような悲鳴をあげる

「私、これでも腕に自信があったから、しつかり理由を聞かないと納得いかないのよね」
」

サギリから逃げられないクロウは蛇に睨まれた蛙のように硬直し続け……

「アマサキ課長……今後の具体的な業務プランについて聞かせてもらえませんか？」

「そうですね。サクライくんもそこまでにしておきましょうか」

「……はい、分かりました」

（助かったぜ、鉄也……）

スツと手を離れたサギリから距離を取りながらクロウは鉄也に感謝するのだった

「それで、結局どうするのですか？」

「まさか各地のテロリストや山賊団を退治しろと？」

「それについてはゴードウィン社長からの特命が入っています」

「特命か……心躍るな」

(嫌な予感しかしない…)

ラミイは心の中でそう思い、そしてその不安は的中した

「これより特務三課は火星へ向かいます」

「火星!?!」

火星は地球以上に無秩序な場所、そこはまさに『黄昏の時代』を如実に表した荒廃とした星であるのだ

「動乱の星、火星か…こいつは忙しくなりそうだな」

未だ見ぬ荒廃とした星、そこで待ち受ける何かにクロウは考えを寄せるのだった